わたくしのシルクロード⑨

横張和子

クチャ出土の舎利容器

今回は、織物の話からちょっと離れて、現在東京国立博物館東洋館所蔵の赤地に華やかに彩画された西域出土の舎利容器について書かせていただきましょう。（図版①）

直径三十八糎、高さ十七・七糎の円筒形の身に、高さ十三糎の円錐形の蓋をのせた帽子箱のような木製容器は、轆轤を使って一木を刳り出して作られています。入念な仕上げで、円錐状の蓋の盛り上りはことに美しいなだらかなカーブを示しています。器の表は木地に織目の粗い麻布を貼りつけ、その上に厚めに顔料を用いて彩画し、その上にさらに透明の油性塗料を塗って、いわゆる密陀絵の手法をとっています。ここでご紹介したいのが、身と蓋に描かれている絵画です。今は油性塗料のためにかなりくろずんでいますが、薄い被膜を通して赤地に緑、黄、白、紺青、茶などの多彩な色や墨書の鮮明な描線が際立ち、彩画の主題への興味と共に人目をひきつけます。

これは明治三十六年、仏教東伝の聖地巡礼を目的に西域に赴い

▶図版①　クチャ将来の舎利容器

た京都西本願寺の大谷光瑞師（一八七六―一九四八）の一行が天山南路（西域北道）のクチャ（庫車、中国の史書にみえる亀茲国の故地）のオアシスの北方のスバシの仏教寺院の廃址で発見、日本に持ち帰ったものです。

このような形をし、器表に彩画のある舎利容器はフランスのP・ペリオやドイツのA・フォン・ル・ユックによっても同じ処で発掘されていますし、有名なクチャのキジルやクムトラの石窟寺院の壁画に描かれた「分舎利図」（釈迦入滅直後、その遺骨は八つの王国に分骨された）においても釈迦弟子ドロナを左右から囲む王達がささげる舎利容器がこの形をとっていますから、この地方に独特な形式であったことが知られます。（図版②）

▼図版②

大谷探検隊が将来したこの舎利容器は発掘時、その器表の装飾は丹や紺青の顔料で、同心円的に環状の帯模様に塗り替えられ、金箔がおかれていました。この彩色の下に絵のあることが分ったのは、これをのちに個人的に所有された方によってでした。そこで二度目の絵の具を丁寧に落すことによって、はじめの細やかな彩画を見出すこととなったのです。

ではその図様についてみていきましょう。まず蓋の方からです。

山の形をした蓋の頂上には直径二糎ほどの鉄の環がつけられ、それを中心にして、下方に向って二条の円帯がめぐらされ、下辺にも同様の帯がめぐらされています。帯の文様は一番上のが波頭文、次のが楕円形の丸文に四つの小点の配されたものの連続文、下辺のが楕円文のまわりに小点をめぐらしたものの連続文で、それらは地中海地域のまたはメソポタミアの古い文様で、ササン朝ペルシアの宮廷で洗練され、その文化が各地に拡がるに従って、このような器物の装飾にも使われるようになったのでしょう。蓋と身の境目に描かれた組紐のような連続文様もササン朝の金工品に見出されるものです。

山形の蓋のなだらかな斜面で、今述べた円帯の間の地には四カ所にメダイヨンが配され、中に、楽器を持つ裸形の童子が描かれています。肉色は黄色（もとは白であったと思われる）と緑に塗り分けられ、黄色の童子たちはその背に緑色の大きな鳥の翼をつけ、緑色に塗られた童子は四対の赤茶の羽の羽をつけています。童子たちの髪形は頭の前と後、それに両側の鬢に髪を残して剃り落し、後髪を束ねていて、それは唐児の髪形です。首から長短二様の玉飾りをつけ、長い方はお腹の方にまで垂れています。童子たちがもっている楽器は琵琶、箜篌（くご）（竪琴）、阮咸かとも考えられるマンドリン様の弦楽器それに笛です。笛も琵琶も箜篌も正倉院の御物の中に見出すことが出来ます。

童子たちをめぐる円環には大ぶりの珠文が連なり、四方の位置に重角文がおかれていますが、このような意匠は、さきにお話ししているシノ・イラニカ様式の錦に最も特徴的なものでした。四つのメダイヨンの間には図案化された山の上に二羽の鳥がおかれています。相対する位置で、山と鳥の描き方に変え、単調を避けようとし、意匠家（あるいは画家）の細心な工夫がうかがわれますが、つまり相対する二組の一方では、山は三角形で、その上に立つ鳥は右が山鳥、左がオウムで、それらは宝石で飾られたリボンをくわえ、互いに頭を後方に振り返らせた図であり、もう一方の組では山は半円形にあらわされ、同様の鳥が二羽、これは木の小枝をついばんで相向っています。このような鳥文は咋鳥文といっ

て、ことに錦の文様に盛んに用いられていることは前回にご紹介しています。このような錦の成立についてはやや論ずべきことがあり、ササン朝のペルシアで製作されたものか、あるいはその滅亡後のことであったのか追究すべき問題点はあるものの、その愛すべき華やかな文様は全く抵抗もなしに各地で受け入れられたのです。アフガニスタンのバーミアンの、また前回ご紹介したキジル最大洞の壁画装飾に用いられています。正倉院御物、例えば螺鈿紫檀の阮咸の背面の装飾は二羽のオウムが螺鈿や琥珀の綬を加えて飛び交う図です。また赤地のオシドリ唐草文錦では向い合う鳥が樹木の枝に飾りひもを結んだものを咋えています。

▼図版③

四人の童子は羽をつけて楽器を奏でる天使たちですが、八枚の羽をつけているのは珍らしく、これは飛翔をあらわすのに鳥翼を用いている西方的な発想が変質して、東方の天衣に移っていく過渡的な試みとしての描きあらわしたものと考えられています。翼から衣に移っていく試みとして童子形の楽天にマントを着せ、その裾が風に飜っているようにあらわしているものもあります。(図版③)

この舎利容器の蓋に描かれた小さな画面から、西域の文化の特質、すなわち西方的なものと東方的なものとの巧妙な均衡やその混淆様式をみてとることができるでしょう。さらにこれを西域絵画としてみるとき、見逃し難いのがその強い墨の描線です。それは鮮やかな色で平塗りされたものの形の輪郭をしっかりと描き起し、細部をも克明に記しています。これを鉄線描といって西域画の顕著な特質とされています。童子の肉身は白あるいは緑に平らに塗られ、細くて弾力のある墨線で輪郭が描かれています。そし

▼図版④

てさらにそれには赤い線が描き加えられています。朱線はその人体の血の色であり、その明暗によってまろやかな肉付けを表現しようとするやり方を凝集して線に置き換えてしまったものです。このような描法は今は焼失して原初の画面はみることのできない奈良法隆寺の金堂壁画の仏菩薩の肉身を描くものにもみられますし、また東方キリスト教美術における人体表現にも見出すことができます。（図版④）古典期のギリシア人が試みた陰影法や遠近法はここでは重要なこととはされず、東方的な線描主義が強まってくるのですが、それは中国の抑揚のある描線とは質を異にし、西域の鉄線描は固く無機質な強さがあり、厳しいところがありま

▼図版⑤

す。それは砂漠に生きる人の性情がもたらすものといってよいのでしょう。しかしこうした線の絵画からはそれゆえある種の強い感銘がひき起されます。童子の表情も人間的な共感（可愛らしさ）よりは鉄線描の強くて厳しい表出の方が優っているのがお分りでしょう。東西の二大宗教絵画にこの線描が採用されたのもそのためです。

次に容器の胴まわりの絵について述べましょう。そのぐるりには仮面をつけ、手足を上げて踊る舞人たちと大鼓をたたき、竪琴を弾じ、ホルンを吹く楽人たち、子どもを含めて総勢二十一人の行列のさまを描き出しています。その姿があまりに生き生きしているので、その何人かを、大学ノートに描き起してみたことがあります。（図版⑤）彩画の人物や服飾やその仕草に描写にはありありとした写実味があって、これはおそらくこの地方で盛んであった伎楽の実景を写したものではないかと思います。

踊る人と楽器を演奏する人とでは服装を異にしています。舞人たちは丸首、長袖の下着を着け、その上に半袖で、腰よりやや下にまでくるやや服飾を凝らした胴着をつけ、下にズボンを履くといった装束です。胴着には袖口と裾まわりに薄絹で作られたかと思われるフリルがつけられています。腰まわりのものには深く丸い切り込みがあります。またそれには白と黄の列をなした点々模

様が目につきますが、これは雲母の円板からなるスパンコールではないかと思います。またそれは腰のところを金属製の小円盤を連ねたベルトで締めています。ズボンは絹織物から仕立てたものと、毛織物から作られたものとあるようです。多くの舞人がこれに四角形の縁どりのある前垂れをつけています。また縁どりのある、先端が燕尾状となった長い帯腰で蝶結びして、腰の左右に飜えさせています。この帯も絹織物でしょう。猿の面をかぶった人物の一人は毛皮をまとっています。もう一人は上下につながり、

Рис. 117. Северная стена. Третьи группа (прорисовка)

▲ ▼ 図版⑥

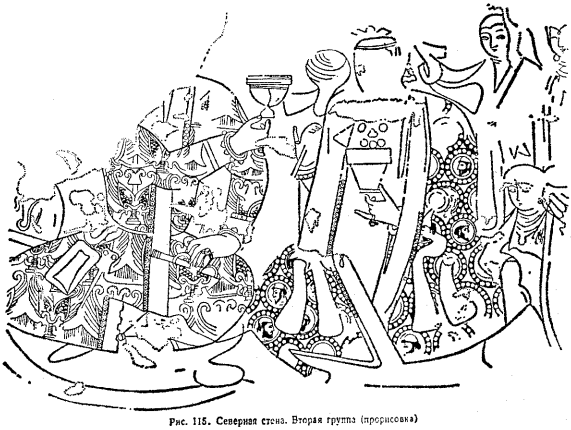

Рис. 115. Северная стена. Вторая группа (прорисовка)

前明きのあるスリムな、今日のスポーツ着によるある形ですが、全面に白黄の点々模様があります。かれらは互いに手を結び、またリボンを持ち合って、舞踏に陶酔しているかのようです。

楽人たちは素足の子どもが担ぐ大太鼓をたたく人からその後に箜篌・タンバリン・小太鼓・角笛などを奏でる人々が続きます。楽人の服装はこの地方の石窟の壁画にみられる亀茲人のものと全く同じで、別布で縁どりされた膝下までの長衣を着ていますが、右側の衿を大きく三角形に折っているのがきわめて特徴的です。長衣の裾から僅かに足首でくくった下袴がみえます。沓は紐でくくったものです。長衣は舞人と同じ金属製の円盤つなぎのベルトで締め、それから短剣を黄色のリボンで吊っています。腰には先の方で結んだたっぷりとった薄物の布をしごきのように垂しています。箜篌を弾く楽人の長衣の縁どり布はおそらく錦でしょう。このような特色ある服装はクチャ地方にばかり行われたのではなく、西トルキスタンでも。例えば、今日のソ連邦ウズベク共和国がアフガニスタンの国境に接するところに近いバラルイク・テペの廃墟の城館の壁画の酒杯を上げる人物群も同様の型の服を着ています。（図版⑥）顔立ちも似ていて、シルクロードのオアシスの住民がアーリア系の人種であったことが分ります。壁画の人物が豪華な織物、錦と考えられるものをふんだんに用いていることには特に関心がそそられます。もはやそれは中国産とはいい難く、ペルシア錦のようであり、経錦ではなく緯錦のようです。中国が専らであった絹織物業も、五世紀から七世紀にかけては、この地方に一大絹業が起って、今度は西から東に向けて、絹は運ばれていきます。シノ・イラニカ錦はこの東西の絹織物のぶつかり合いの中に生まれてきます。クチャ出土の舎利容器の彩画もまたこうした東西の交流の中に、両者の要素をたっぷりと盛り込み、西域独特の様式を作り出しています。それにしても舎利容器というのに何と陽気な管弦舞踊の図でしょう。葬礼の器物にはおよそそぐわないおかしさがあるものの、かえってそこにシルクロードの住民の生活の歓びが、この小さな画面から躍如として伝えられてくるような気がします。むかしの、わたくしの大学ノートには落書のような語句が書き添えてありました。

管弦伎楽、特善諸国、
服飾錦毳、断髪巾帽、

毳とは毛織物のことです。クチャ楽（がく）ともいわれたその管弦伎楽は唐の長安の都の巷間をにぎわし、また奈良の都にも一きわの精彩をそえたことでした。

（山脇女子短期大学）